

## 「不満」——イクバルのウルドゥー詩(5)——

松村 耕光\* 訳

### はじめに

本稿は、ムハンマド・イクバル (Muhammad Iqbal 1877-1938) のウルドゥー詩「不満 (Shikwah)」の全訳である。

本詩は、1911年4月にラホールで開催された、イスラーム擁護協会 (Anjuman-e Himāyat-e Islām) の年次大会でイクバル自身によって朗読され<sup>1)</sup>、後に第1ウルドゥー詩集『鈴の音 (Bāng-e Darā 1824年)』に収められた<sup>2)</sup>。

本詩は、6行(6半句)で1連が構成されており、全部で31連より成る<sup>3)</sup>。この詩型はムサッダス (musaddas) と呼ばれ、ウルドゥー詩では、イスラームの預言者ムハンマドの孫フサイナー行がカルバラー (Karbālā) でウマイヤ朝軍に殺害された事件(680年)を描写し、フサインやその部下の死を哀悼する詩でよく用いられている<sup>4)</sup>。ムスリムの衰退を嘆く、近代詩人アルターフ・フサイン・ハーリー (Alṭāf Ḥusain Ḥālī 1837-1914) の有名な詩「イスラームの盛衰 (Madd-o-jazr-e Islām 1879年)」でもこの詩型が用いられている<sup>5)</sup>。

ハーリーの詩と同様にイクバルの本詩もまた、ムスリムの衰退を主題としているが、直接神に対して、恋人の不実をなじるかのようになり、神はムスリムに情けをかけてくれなくなったと詩人が不満を述べるところに特異性がある<sup>6)</sup>。

本詩には続篇とも言うべき「不満への回答 (Jawāb-e Shikwah 1913年)」という同詩型の詩がある。次回訳出の予定である。

---

\* 大阪大学世界言語研究センター教授

- 1) イスラーム擁護協会は、ムスリムに教育を普及させるために、そしてイスラームに対する攻撃に対処するために、1884年、ラホールで設立された組織で、イクバルは1900年から1904年まで毎年、同協会の大会でナズム (nazm 特定の主題について作られた詩) を発表していた。「不満」は、1905年から1908年にかけての西欧留学から帰国して初めて同協会の大会で発表した詩である。
- 2) 詩集『鈴の音』収録時に4か所、詩句が変更されている (Raḥī'ud-dīn Ḥāshimī, *Iqbal kī Ṭavīl Naẓmēn: Fikrī aur Fannī Muqāla'ah*, Lahore, 1985, pp.30-31)。
- 3) 脚韻構成はaaaabbで、連ごとに脚韻は変更可能である。
- 4) このような詩はマルスィヤ (marthiyah 哀悼詩) と呼ばれる。マルスィヤにはカルバラーの事件を主題とするものとそうでないもの(指導者、偉人、家族等の死を哀悼するもの)の2種類がある。
- 5) この詩は一般には「ハーリーのムサッダス (Musaddas-e Ḥālī)」と呼ばれている。この詩は英訳されている。Shackle, Christopher and Javed Majeed, tr., *Hālī's Musaddas: The Flow and Ebb of Islam*, Delhi, 1997。
- 6) このため物議を醸したようである。恋人の不実をなじる詩は、ワーソーホト (wāsōkht) と呼ばれ、ムサッダス詩型で作られることが多かった。

## 不満

自分を害することができるでしょうか、自分の利益を忘れていられるでしょうか  
明日のことを考えず、昨夜の哀しみに浸り続けられるでしょうか  
夜鶯ブルブルの嘆きをずっと聞いていられるでしょうか  
友よ、私もまた沈黙する薔薇なのでしょうか<sup>7)</sup>  
言葉の力が私に勇気を教えてくれました  
私には——お赦しあれ——神様に不満があるのです

私たちが神様に従順なことは世に知られていますが  
私たちが苦しんでいることをお聞かせしなければなりません  
私たちは嘆きに溢れた、沈黙した楽器なのです  
口に嘆き声が現れたら抑えることはできないのです  
神様、忠実な僕しもべの不満の声をお聞きください  
称賛ばかりしている者の不平もどうかお聞きください

神様は世界が誕生する前からおられました  
薔薇は薔薇園を飾りはしても、その芳香は広がってはいませんでした  
普く恩恵を施される神様、公正なご判断をお願い致します  
そよ風なしにどうして薔薇の芳香は広がるのでしょうか  
散り散りになることにこそ私たちは心の安らぎを感じていたのです  
そうでないなら、神様が愛された御方の民はみな狂人だったのでしょか<sup>8)</sup>

私たちが現れるまで世界には奇妙な光景が広がっていました  
石が礼拝され、木が崇拜されていました  
人間の目は見えるものに慣れていたので  
見えない神をどうして信じることができたのでしょうか  
神様の御名を唱える者がいたかどうか、神様はご存知です  
ムスリムの腕の力が神様のために事を成し遂げたのです

セルジュークやトゥーラーンの民がいました  
中国には中国人が イランにはササン朝の者たちがいました  
この町にはギリシア人も  
この世界にはユダヤ教徒もキリスト教徒もいました  
しかし神様の御名において剣をとったのは誰だったのでしょうか

7) 夜鶯ブルブル (bulbul) は求愛者を、薔薇は恋の対象を意味する。ガザル (ghazal 抒情詩) では、薔薇は夜鶯に関心がな  
いので、あるいは、夜鶯を苦しめるために、いくら夜鶯が鳴いても (愛を訴えても) 薔薇は無視することが多い。  
イクバルのこの句は、このようなガザルの伝統を踏まえている。

8) 「神様が愛された御方」 イスラームの預言者ムハンマドのこと。  
「神様が愛された御方の民」 ムスリムのこと。

乱れを正したのは誰だったでしょうか

神様の戦士だったのは私たちだけでした  
陸で、そして海で私たちは戦いました  
私たちは礼拝開始を告げ知らせました——時には西欧の教会で  
時にはアフリカの焼けつく砂漠で  
支配者たちの威光など私たちには何の価値も持たず  
私たちは命の危険にさらされても信仰告白の言葉を唱えていたのです

闘いの辛酸を舐めるために私たちは生きていました  
神様の御名の栄光のために私たちは死んでいきました  
征服しようとして剣をふるったことはありません  
命を賭けて私たちが世界を駆け巡ったのは富のためだったでしょうか  
私たちの仲間が世界の富を求めていたのなら  
偶像を売らずにどうして偶像を破壊したりしたのでしょうか

戦場に足を踏み入れたら一步も退くことはありませんでした  
勇者ですら浮足立って逃げて行きました  
神様に反抗する者がいると私たちは怒り狂い  
剣などものともせず、大砲とも戦いました  
私たちは一神論のしるしをあらゆる心に刻みこんだのです  
脅威にさらされてもこの教えを宣べ伝えたのです

お答えください——ハイバルの門を打ち壊したのは<sup>9)</sup>  
皇帝の町を征服したのは一体誰だったのか<sup>10)</sup>  
創られた神々の偶像を破壊したのは  
異教徒の軍隊を壊滅させたのは誰だったのか  
イランの拝火教寺院の火を消したのは<sup>11)</sup>  
神様のことを再び語ったのは誰だったのか

神様のみを求めたのは  
神様のために闘いの辛酸を嘗めたのはどの民だったでしょうか  
誰の剣が世界を征服し、世界を統治したのでしょうか  
神を称賛する誰の声で神様の世界は目覚めたのでしょうか  
誰を恐れて偶像どもは恐れおののき  
ひれ伏して「アッラーこそ唯一の神」と言っていたのでしょうか

9) 「ハイバル (Khaibar) の門」 628年、ムスリムはメディナ北方約150kmにあるユダヤ教徒の町ハイバルを攻撃した。このとき、後に第4代カリフとなるアリーはハイバルの砦の門を破壊したと言われている。

10) 「皇帝の町」 コンスタンティノーブルのこと。この句は1453年の、オスマン・トルコによるビザンツ帝国征服に言及している。

11) 651年の、ムスリムによるササン朝ペルシア征服に言及している。

闘いの最中でも礼拝の時刻となると  
ヒジャーズの民はメッカを向いて額づいたのです<sup>12)</sup>  
王マフムードも奴隷アヤーズも一緒に並び<sup>13)</sup>  
主従の区別は存在しなかったのです  
僕も主も、富を持たない者も持つ者も一つとなったのです<sup>しもべ、あるじ</sup>  
神様の御許に集うときには一つとなったのです

私たちはこの世界の宴を朝から晩まで  
一神論の酒を持ち、酒杯のように巡ったのです<sup>14)</sup>  
神様の教えを携えて、山や荒野を巡ったのです  
うまくいかなかったことがあるかどうか、神様をご存知の筈  
私たちは荒野どころか海も捨て置かず  
大西洋にも馬を乗り入れたのです

私たちは世界から偽りをなくしました  
人類を隷属の鎖から解き放ちました  
カアバ神殿を額づく額で満たし  
コーランを胸に抱きしめました  
それなのに忠実ではないとおっしゃるのですか  
私たちが忠実でないなら、神様も愛されるべき存在ではありません

私たちの他に、罪深い者たちが  
慇懃な者たちが、傲慢の酒に酔っている者たちがいます  
怠け者が、愚か者が、賢者がいます  
神様の御名を不快に思う者たちも数多くいます  
神様は私たち以外の者に情けをおかけになり  
雷は哀れなムスリムの上に落ちてくるのです

偶像寺院の偶像どもは言うのです、「ムスリムは去った」と  
偶像どもは喜んでいるのです、「カアバ神殿の守護者は去った」と  
「世界の宿場からラクダに歌を聞かせる者たちは去った」<sup>15)</sup>  
「コーランを抱えて去った」と  
異教徒たちがほくそ笑んでいるのをご存知でしょうか  
唯一神の教えを神様ご自身は重んじていらっしゃるのでしょうか

12) 「ヒジャーズの民」 ムスリムのこと。ヒジャーズはメッカやメディナのある地域。

13) マフムード (Mahmūd 971–1030) はガズナ朝の君主。アヤーズ (Ayāz) はマフムードが寵愛した奴隷。

14) 酒席で酒杯は飲み回される。

15) ラクダを早く歩かせるためにラクダ引きはフダー (hudā) という歌を歌う。

不満があるわけではないのです、彼らの倉が満ち溢れていることに  
宴の席での話し方も知らないような者たちの倉が  
何ということでしょう、異教徒たちは天女と邸宅を手に入れるのに  
哀れにもムスリムには天女との生活を約束してもらっているだけなのです  
もはや私たちには恩恵が授けられていないのです  
以前のような思いやりが見られないのは何故なのでしょうか

何故ムスリムにはこの世の富がないのでしょうか  
神様のお力は無限で、計り知れないというのに  
神様がもしお望みになれば、砂漠の中からでも水がわき出るというのに  
荒野の旅人は蜃気楼の水で本当に顔を打たれるというのに  
私たちは非難され、名誉を失い、貧しいのです  
神様に身を捧げると恥辱という報いを得るのでしょうか

今や世界は私たち以外の者を慕っています  
私たちにあるのは幻想の世界です  
私たちは去り、他の者たちが世界を担ったのです  
ですから、世界から唯一神の教えが消えた、とおっしゃるべきではありません  
世界で神様の御名があがめられるようにと私たちは生きていますが  
酌人が去り、酒杯だけが残るようなことがあるのでしょうか

神様の宴は終わり、神様を慕う者たちは去りました  
夜のため息は消え、朝の嘆きも消えました  
心を神様に捧げ、彼らは得るべきものを得て去ったのです  
来て坐る間もなく追い出されてしまったのです  
恋する者たちは明日の逢瀬を約束してもらって去ったのです  
その者たちをどうか神様の美しいお顔の灯火で探し出してください<sup>16)</sup>

ライラーの恋の苦しみも、カイスの胸の思いも<sup>17)</sup>  
ナジュドの砂漠や山を駆け巡る鹿の素早さも  
恋する心も、美の魔力も  
神様の御使者ムハンマド様の民も、神様も以前のままです  
それなのに理由もなく不快な表情をされるのはどうしてなのでしょう  
恋焦がれる者たちに怒りの眼差しを向けられるのはどうしてなのでしょう

神様を、アラブの御使者様を見捨てたのでしょうか<sup>18)</sup>

16) 「灯火で探す」は、非常に努力して探す、という意味のウルドゥー語の言い回し。

17) カイス (Qais) とライラー (Lailā) は有名なアラブ悲恋物語の登場人物。カイスはライラーを恋するあまり発狂し、ナジュド (Najd) の砂漠をさ迷い歩いた。カイスはマジュヌーン (Majnūn ジンにとりつかれた狂人) と呼ばれる。

18) 「アラブの御使者様」 イスラームの預言者ムハンマドのこと。

偶像制作を生業<sup>なりわい</sup>としたでしょうか、偶像破壊をやめたでしょうか  
恋を、恋の錯乱を捨てたでしょうか<sup>19)</sup>  
サルマーンとウヴァイス・カラニーのしきたりを捨てたでしょうか<sup>20)</sup>  
胸には神様を称賛する焔を秘めているのです  
私たちは黒人ビラルルのように日々を送っているのです<sup>21)</sup>

私たちの恋心は以前通りではありませんが  
私たちは信服の道を歩んではいませんが  
礼拝の方向を示す磁石のように私たちの心は震えてはいませんが  
私たちは忠節の法に従ってはいませんが  
神様は私たちとも、他の者たちとも付き合っておられます  
口にすべきことではないのですが、神様もまた誠実ではないのです

神様はファーラーンの山の頂きで宗教を完成されました<sup>22)</sup>  
仕草一つで数千の心を奪いとられました  
神様は恋の果実を焔で満たされ  
そのお顔の熱気で宴を熱くされたのでした  
今、私たちの胸にはどうして火花がないのでしょうか  
私たちはあの身を焦がしていた者たちです——お忘れでしょうか

ナジュドの谷にはもうあの鎖の音はしていません<sup>23)</sup>  
カイスはもう象の座席を一目見ようとする狂人ではありません<sup>24)</sup>  
もはや勇氣はなく、私たちは変わり、心も変わってしまったのです  
神様が宴におられないので、家は荒れ果ててしまいました  
何と素晴らしい日なのでしょう、溢れんばかりの魅力を湛え  
ボールをとって私たちの宴を再び訪れてくださる日は<sup>25)</sup>

異教徒<sup>よそもの</sup>たちは薔薇園の小川のほとりで酒を飲み  
酒杯を手<sup>て</sup>に鳥のさえずりを聞いています  
薔薇園の酒盛りの騒ぎから遠く離れて  
神様を恋い慕う者たちは「フー」の声を待ち望んでいます<sup>26)</sup>

19) 恋は熱烈な信仰を意味する。

20) サルマーン (Salmān) とウヴァイス・カラニー (Uvais Qarānī) は、イスラームの預言者ムハンマド時代の熱心なムスリム。

21) ビラルル (Bilāl) はエチオピア系のムスリムで、イスラーム最初期の入信者。美声の持ち主で、礼拝開始を告げ知らせる係を務めたことで有名。

22) 「ファーラーン (Fārān)」 メッカ近郊の山。コーラン「食卓の章」3節を参照。

23) 「鎖の音」 発狂したカイスを縛る鎖の音。

24) 象に乗って他の男に嫁ぐライラーを一目見ようとカイスは後を追った。

25) この連の最後の2行はペルシア語。

26) 「フー (hū) の声」 神を恋い慕う者たちを陶醉に誘うきっかけとなる声。

蛾に再び自分の身を焼く意欲を与えてください<sup>27)</sup>  
人々の心を焼くよう、「古」の雷にお命じください<sup>28)</sup>

さまよえる民は再びヒジャーズに向かうのです  
飛翔の情熱は翼のない夜鶯<sup>フルフル</sup>を羽ばたかせたのです  
忠誠という芳香が薔薇園の蕾一つ一つの中で身悶えしています  
楽器は撥を待っているのです、神様に演奏して頂きたいのです  
弦から抜け出ようとして歌はもがいています  
あの火に焼かれようとしてシナイの山は悶えているのです<sup>29)</sup>

ムスリムの難局を打開してください  
とるに足らぬ蟻をソロモン王と肩を並べられる存在にしてください<sup>30)</sup>  
今や手に入らない商品である愛の価格を手頃なものにしてください  
インドの異教寺院に坐す者たちをムスリムとしてください<sup>31)</sup>  
私たちが耐え忍んできた悲しみは血の河を流し  
切り刻まれた胸の中では泣き声が悶え苦しんでいるのです<sup>32)</sup>

芳香が薔薇園の秘密を薔薇園の外へ持ち去りました  
薔薇自身が薔薇園の秘密を漏らしてしまったのです  
薔薇の季節が終わり、薔薇園の秩序は乱れてしまいました  
薔薇園の歌い手たちは枝から飛び立ってしまいました  
一羽の夜鶯<sup>フルフル</sup>だけが今尚懸命に歌っています<sup>33)</sup>  
その胸には歌の嵐が今尚吹き荒れているのです

枝から鳥たちは飛び立ち  
花びらは散ってしまいましたが  
薔薇園の古くからある小道は荒れ果て  
枝は葉の衣を失い、裸になってしまいましたが  
その夜鶯<sup>フルフル</sup>は季節に束縛されたりはしないのです  
その嘆きを理解する者が薔薇園にいればよいのですが

死ぬことに歓びがなく、生きることに面白味がなく  
何か面白いことがあるとすれば、それは悲嘆を押し殺すことなのです  
私の鏡の中で光が激しく悶えています

27) 蠟燭の焰に飛び込み焼死する蛾は求愛者の象徴。

28) 「古」の雷」恋（熱烈な信仰）の雷。

29) 「あの火」シナイ山における神の顕現に言及している。

30) コーラン「蟻の章」17-19節を参照。

31) 「インドの異教寺院に坐す者たち」インドの宗教に影響されたムスリムを意味するようである。

32) この連の最後の2行はペルシア語。

33) イクバルのこと。

私の胸の中で光が激しく震えています

しかし、この薔薇園には見てくれる者はいないのです

胸に傷を持つチューリップはどこにも咲いていないのです<sup>34)</sup>

この孤独な<sup>フルフル</sup>夜鶯の歌声で人々の心が引き裂けますように

この出発の合図で心が目覚めますように

新しい忠誠の誓いによって心が蘇りますように

再びあの昔の酒を心が求めるようになりますように

ペルシアの酒甕ですが、私の酒はヒジャーズの酒なのです<sup>35)</sup>

インドの歌ですが、私の調べはヒジャーズの調べなのです

---

34) 「チューリップ」 ここではムスリムの窮状を憂える人を意味している。チューリップの花の中の黒い部分は、恋に身を焦がしたしるしとされている。

35) 「ペルシアの酒甕」 ペルシア詩の影響を受けていることを示している。